

長岡新田関係遺跡

(第 2 次)

末広 A ・ 落合 A 遺跡

確認調査

末広 B ・ 落合 B ・ 羽場垣外
所開橋南地点

昭和 61 年

箕輪町教育委員会

長岡新田関係遺跡

序

箕輪町教育委員会

教育長 樋口彦雄

上伊那広域水道構想の検討が新規ダム建設計画にあわせて、昭和47年度より行なわれてきた。この新規ダム計画は、長岡新田地域の沢川水系を箕輪ダムとして建設することにきめ、昭和55年に上伊那広域水道用水企業団を設置した。

長岡新田関係遺跡の発掘調査は、この箕輪ダム建設に伴うための緊急発掘調査である。長岡新田には数か所の遺跡があるものと考え、そのうち昭和59年度に、末広A・落合A・黒尾の三地点の確認調査を行ない、昭和60年度にはそれをもとに確認できた末広・落合の発掘のほかにもその他の四か所の確認調査を行なった。

発掘調査の結果の細部は章を追って明らかにするが、ダム建設のため、長岡新田の全戸が、他地区に夫々移住してしまい無人となっている現在、遠く縄文の時代に、この長岡新田に住居した跡のあったことは、今後の研究にとって重要な発掘調査と思う。

今回特に調査員としてご協力いただいた、伊那市教育委員会飯塚政美氏や、作業の先達の榮学芸員ほか調査団の皆さん、本報告書作製に関係された方々に厚く御礼申し上げます。

例 言

1. 本書は、長野県上伊那郡箕輪町長岡新田に所在する遺跡の発掘調査及び確認調査の報告書である。
2. 発掘調査及び確認調査を実施した場所は次の通りである。

発掘調査	末広A遺跡	落合A遺跡	2ヶ所
確認調査	末広B地点	落合B地点	4ヶ所
	羽場垣外地点	所開橋南地点	

3. 本調査は、伊那建設事務所の委託を受けた箕輪町教育委員会が実施した。
4. 発掘調査は昭和60年6月27日～8月8日まで実施した。

調査終了後に整理作業を実施し、引き続いて報告書作成を行なった。

作業の分担は次の通りである。

土器の復原 福沢幸一 土器の実測・トレース 竹入洋子 石川寛
土器の拓本・断面実測・トレース 山内志賀子 遺構実測図の整理・トレース
竹入洋子 石川寛 小池君代 石器実測・トレース 竹入洋子 山内志賀子
石川寛 拓影・図版作製 山内志賀子 竹入洋子 写真図版作製 山内志賀子
柴登巳夫

5. 本書に掲載した遺構及び遺物写真は柴登巳夫が撮影したものを使用した。
6. 本書の執筆は整理担当者が行ない、文末にそれぞれの文責を記した。
7. 本書の編集は、柴登巳夫が行なった。
8. 土器の考察は飯塚政美氏にアドバイスをいただいた。
9. 本書の資料は箕輪町郷土博物館に保管されている。

本文目次

題 字	教育長 樋 口 彦 雄
序	” ”
例 言	

第 I 章 調査地の立地	1
第 1 節 位 置	1
第 2 節 遺跡周辺の自然環境	2
第 3 節 歴史的環境	3
第 II 章 発掘調査の経過	4
第 1 節 調査の経過	4
第 2 節 調査の概要	4

末 広 A 遺 跡

{	本 文 目 次
{	挿 図 目 次
{	図 版 目 次

第 I 章 発掘調査の結果	7
第 1 節 調査結果の概要	9
第 2 節 遺 構	9
1 住居址	9
2 土 竈	15
第 3 節 遺 物	17
1 土 器	17
2 石 器	19
3 金属器	22

挿 図 目 次

末 広 A 遺 跡

第1図	位置図	1
第2図	遺跡周辺地形	2
第3図	遺跡分布図	3
第4図	地形及び調査範囲図	7
第5図	発掘調査区全測図	8
第6図	第1・4号住居址及び土址Ⅳ・Ⅴ実測図	10
第7図	第4号住居址実測図	10-1
第8図	第1号住居址実測図	10-2
第9図	第1号住居址カマド実測図	11
第10図	第2号住居址実測図	11
第11図	第3・5・6号住居址及び土址Ⅳ実測図	12
第12図	第3号住居址実測図	12-1
第13図	第5号住居址実測図	12-2
第14図	第6号住居址実測図	12-3
第15図	第3号住居址カマド実測図	14
第16図	第5号住居址カマド実測図	14
第17図	土址Ⅰ実測図	15
第18図	土址Ⅱ実測図	15
第19図	土址Ⅲ実測図	16
第20図	土址Ⅳ実測図	16
第21図	土器拓影実測図	17
第22図	出土土器・陶器実測図	18
第23図	出土石器実測図-1	20
第24図	出土石器実測図-2	21
第25図	金属器実測図	22

図 版 目 次

図版Ⅰ	遺跡遠望
図版Ⅱ	住居址状況
図版Ⅲ	土址状況
図版Ⅳ	遺物出土状況
図版Ⅴ	出土遺物
図版Ⅵ	調査状況

第 I 章 調査地の立地

第 1 節 位 置 (末広 A 遺跡)

末広 A 遺跡は、長野県上伊那郡箕輪町大字東箕輪2316、2317-1、2319-1、2319-2番地に位置している。長岡と南小河内の間に流れ出す沢川は、長岡新田の谷を形成し、長岡から約 3 km ほど上った地点で川は二つに分れている。ここが落合である。左側に入ると日向地区で、落合から約 1.5 km ほど上った所に末広地区が開けている。文字通りの末広で、以前は十数戸の家が存在しており、日向地区の中心であった。標高は遺跡の中心付近で 907 m 前後を示し、天竜川面との比高 210 m 余を計る。



①末広 A 遺跡 ②末広 B 地点 ③落合 A 遺跡 ④落合 B 地点 ⑤羽場垣外地点 ⑥所開橋南地点
第 1 図 位置図

第2節 遺跡周辺の自然環境

南流する天竜川に注ぐ中小河川は、扇状地形や、小さな台地を形成している。町内において竜東地籍では沢川が最も大きな川であり、流路は約10kmを計る。沢川によって形成された扇状地の上に長岡が位置している。ここは土地が肥沃で地深なため根菜類の栽培に適し、長い間続けられている。沢川は、天竜川合流点より約3km上流で二つに分かれ、左手方面は日向地区と呼ばれ、有賀峠を越えて諏訪に通じている。左手方面は日影地区と呼び、松尾峠を越え高遠に通じている。

一帯は石灰岩地帯で、明治20年ころまでは日影入り地区において石灰岩を掘り出し、その場で焼き、売り出していた。熊倉沢地籍には鍾乳洞（町指定天然記念物）が二ヶ所発見されている。過去においてこの谷では、水晶・マンガンなどの鉱物の採掘も行なわれた。

沢川の両岸にはわずかに平地が形成されており、ここを利用して耕地としている。遺跡は川の右岸に集中しているが、傾斜地のわずかなテラスを利用して位置している。落合地籍における標高は820m前後であり、天竜川面との比高は約140mを計る。



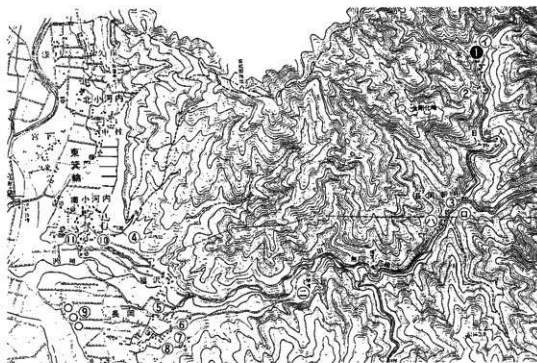
第2図 遺跡周辺地形（航空写真）

第3節 歴史的環境

箕輪町内には多数の遺跡が確認されているが、特に天竜川東岸段丘上はその密度が最も高い地域である。長岡の台地上には多くの古墳が存在し古代からの繁栄を物語っている。

また萱野遺跡を初めとして、山中に入り込んだの遺跡が多いところから、長岡新田の谷間にも以前から遺跡の存在が予測されていた。戦前・戦後を通して町内における考古学研究における草分けであった大槻幹・小川守人両氏はこの谷間から多くの遺物を収集している。末広地籍から収集された小形瓜形搔器の一群は時代的古さからも貴重な遺物である。

これらの遺物の出土をふまえながら、昭和59年より始まった箕輪ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査において、次々に発見された遺構・遺物は長岡新田の歴史を一気に数千年のかなたに引き上げたのである。そしてダム建設と共に継続されるであろう発掘調査によって新たな発見が予測される。



- 末広 A ②黒尾 ③落合 A ④上の平 ⑤角畑古墳 ⑥源波古墳
- ⑦源波 ⑧角道 ⑨羽場の森古墳1~3号 ⑩日向前 ⑪殿屋敷
- (確認調査地) ⑬末広 B地点 ⑭落合 B地点 ⑮羽場垣外地点 ⑯所開橋南地点)

第3図 遺跡分布図

第Ⅱ章 発掘調査の経過

第1節 調査の経過

昭和59年夏、遺跡の存在を確認するための確認調査が実施された。末広・落合・黒尾の三地域であった。この三地域共に遺構及び遺物が確認されたため本年度の本発掘調査となったのである。これより先の昭和59年10月には県教育委員会文化課・上伊那ダム建設事務所・箕輪町教育委員会合同で現地協議を実施した。その結果、ダム建設の進行に併せて、本年度は末広A・落合Aの二地区を本調査し、末広B・落合B・羽場垣外・所開橋南の四地区を確認調査するという計画を立てた。

これにより昭和60年6月下旬より8月中旬に至る間、発掘調査及び確認調査を実施したのである。その結果、縄文時代早期からの遺構・遺物が確認されたのである。以下遺跡ごとにその概要を示した。

第2節 調査の概要

- ・遺跡名 末広A・落合A遺跡
- ・確認調査地点 末広B・落合B・羽場垣外・所開橋南地点
- ・所在地 長野県上伊那郡箕輪町大字東箕輪長岡新田
- ・発掘期間 昭和60年6月27日～8月8日
- ・調査委託者 伊那建設事務所長 須沢沖夫
- ・調査受託者 箕輪町教育委員会
- ・調査団の構成は下記の通りである。

調査団

顧問	丸山敏一郎	埋蔵文化財センター第二部長
団長	樋口彦雄	箕輪町教育委員会教育長
担当者	柴登巴次	箕輪町郷土博物館学芸員
調査員	飯塚政美	伊那市教育委員会職員
	石川寛	箕輪町役場職員

作業協力者

山内志賀子 小池君代 唐沢清人 清水節治 松田幸雄 小林光治
堀内昭三 野沢徳章 野沢良久 藤森秀男 小林信義 浦野 弘
中林民造 林 操 戸田きみ子 山岸 工 関 ゆう子 白鳥宏幸
白鳥伸和 小林正之進 山口勝博

参 与

堀口 泉	教育委員会教育委員長
那須与一	教育委員
桑沢良平	〃
小島迪彦	〃
荻原貞利	文化財保護審議会委員長
平沢新平	〃 副委員長
市川脩三	〃 委員
矢沢喬治	〃
小林健男	〃
山口豊春	〃
有賀英幸	〃
原 久美	〃
小林正之進	〃
向山 章	〃

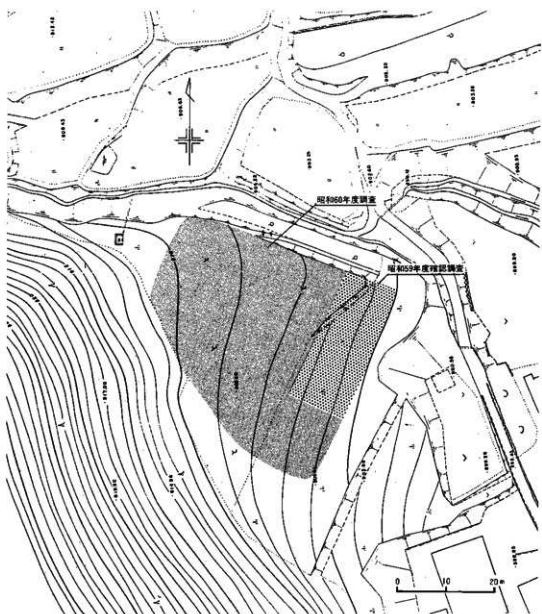
調査に関する事務局の構成組織は下記の通りである。

樋口彦雄	教育委員会教育長
北川文雄	〃 社会教育課長
太田文陳	〃 社会教育係長
柴 登巳夫	笑輪町郷土博物館学芸員
竹入洋子	〃

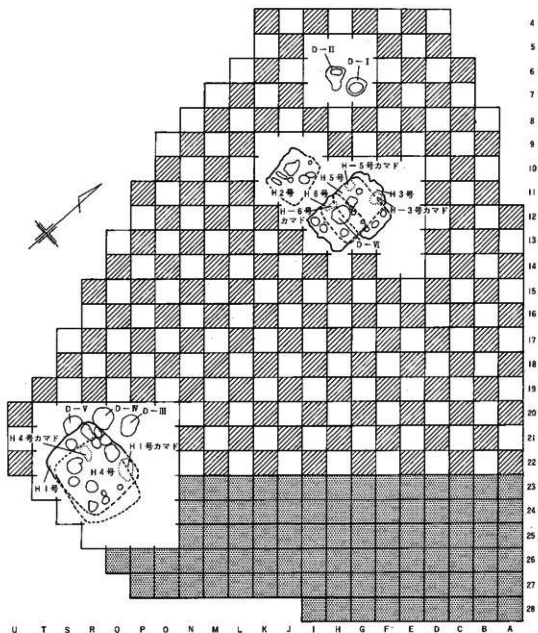
(文責 事務局 柴 登巳夫)

末広 A 遺跡

第 I 章 発掘調査の結果



第4図 地形及び調査範囲図



第5図 調査区全測図

第1節 調査結果の概要

昭和59年度における確認調査時において、第1号住居址は存在が明らかになっていた。まず第1号住居址が検出され、続いて第2号住居址が発見された。この遺構が平安時代の住居址ということは確認されたが、カマドや主柱穴は存在せず、またプランも不安定であった。約2メートル離れて3つの住居址が切り合って確認され、それが第3・5・6号の住居址である。また第1号住居址のプラン確認中にカマド址が第1号住居址のほぼ中央に検出され、精査の結果第1号住居址を造る以前にほぼ同位置に住居址が存在していたのであった。それを第4号住居址とした。いずれも平安時代後期、11世紀ころのものであろう。他に縄文時代と考えられる土城が6か所検出された。G・H 6・7グリットを中心に土城1・2が位置している。直径1.7メートルほどの土城であるが、縄文前期の土器片が数片検出されている。また第1号住居址の北西に3か所の土城がほぼ並ぶように位置しているが、いずれも出土遺物はない。第4・5号土城は第1号住居址によって切られており、覆土の状況より縄文時代の土城と考えられる。第6号住居址のほぼ中央に直径1.8メートル、深さ80センチの円形の土城が確認された。底は平らで堅い敷きになっており、中央に大きき40センチほどの石皿が据えてあった。土城中からは縄文時代前期の土器片が出土していることから、同時代の土城である。中央に大きな石皿が据えてあることから、土城の使用目的を多方面に推測することができる。

第2節 遺 構

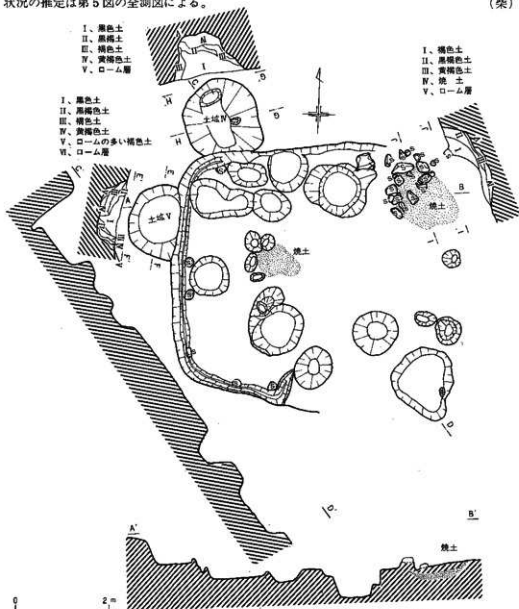
1 住居址

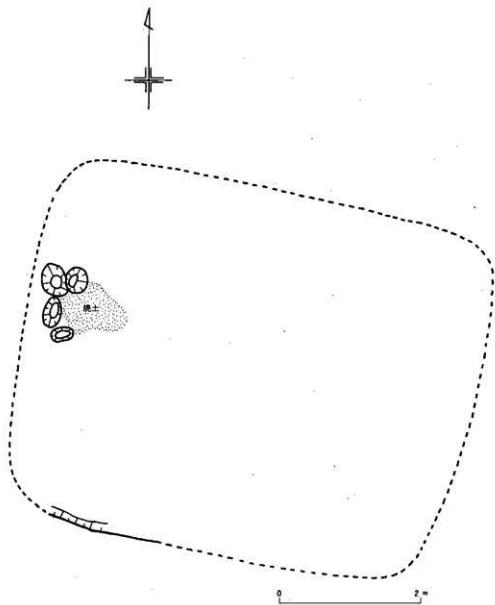
1) 第1・4号住居址 (第6図)

調査地区の南側角に検出された住居址である。平面プランは隅丸長方形を呈すると推測されるが、東側の壁は未確認である。主軸方位はほぼ西を示し、長軸は推定6.5メートル、短軸5.4メートルを測る。西壁は山際であるため約1メートルと深く、垂直に近い急な立上りを示している。壁直下には深さ15センチ、巾10～15センチの周溝が巡らされている。西壁寄りの床面は堅く踏み固められているが、第4号住居址のプラン範囲は床面の凹凸が多く、また軟弱な部分が目立った。両住居址の主柱穴と思われるものは4か所ほど考えられるが、位置的にやや不適当なものもある。

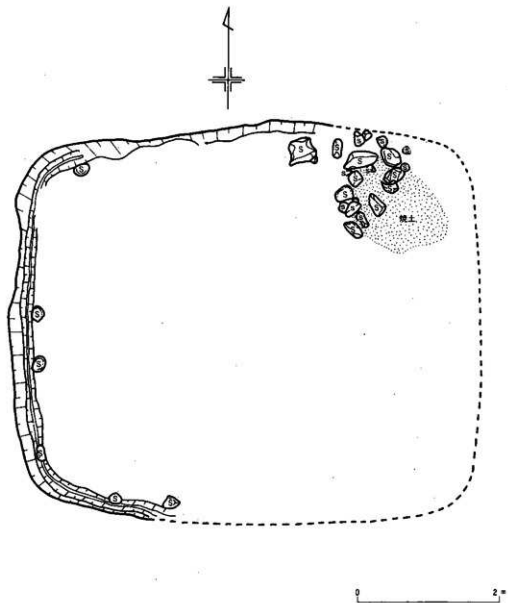
カマドは北東の角に位置しており、傾斜面に掘り込んだ住居址であるため壁高の状況などを考慮しながら決定したものと推測する。カマドの軸線は住居址の軸線とはやや方向がずれている。煙道部は、はっきりしないが、袖部を形成する芯石は床面まで掘り下げて突き立てられて

いる。天井石はほぼその位置を伴って検出された。火床中央には普通支脚が立っているものだが、本例にはそれに概当する石は見られなかった。火床部は比較的良好な遺存状態で、火熱を受けた状況が観察された。カマドの周囲には平石や円礫が無雑作に散らばっており、長い間の耕作や、木の根などの影響で、移動してしまったものと考えられる。カマド左側には大きなピットがあり、遺物が落込んでいた。第4号住居址は第1号住居址より以前に構築されたものであるが、出土遺物の区別は判然としなかった。第1号住居址の中央部やや西寄りにカマドが位置されていたもので、火床部と芯石の基部の凹んだ状況のみを確認した。両住居址の切り合い状況の推定は第5図の全測図による。(柴)

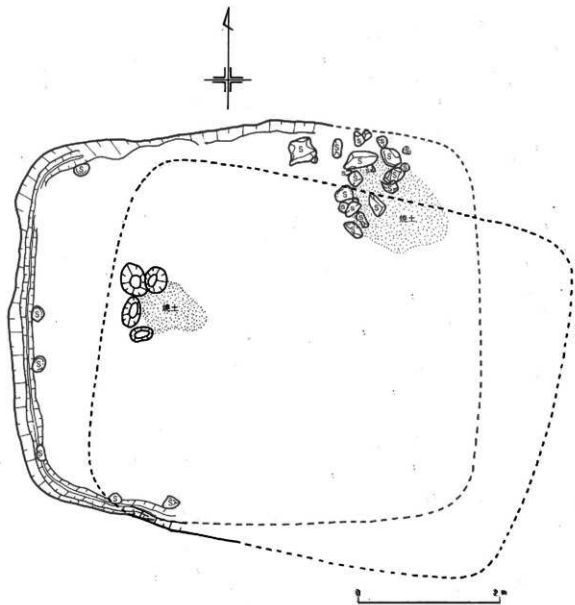




第7图 第4号住居址实测图



第8图 第1号住居址实测图



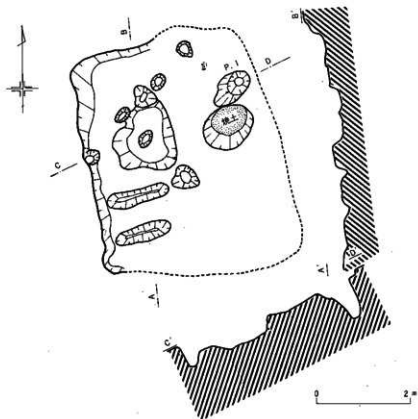
第7图 第4号住居址实测图



第9図 第1号住居址カマド実測図

2) 第2号住居址 (第10図)

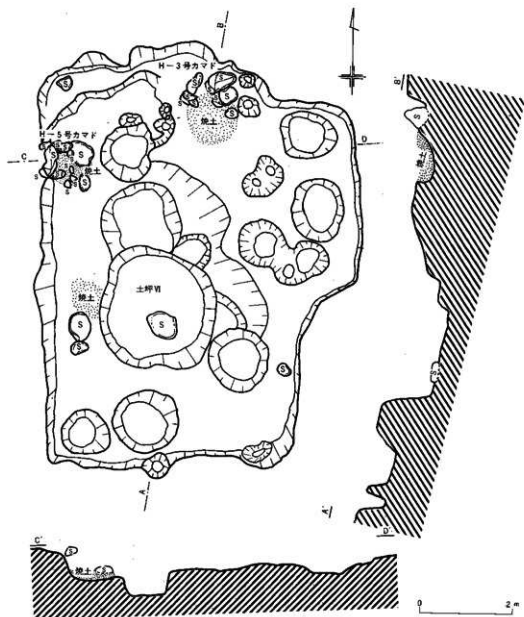
本住居址はJ-10・11グリッドを中心に位置している。プランは東西推定3m、南北推定約4mと思われる。図に示すように西壁はほぼ確認できたが、他の壁は未確認である。住居址内は凹凸が多く床面の状況としては全く察しておらず、主柱穴と推定できるものはP.1の1ヶ所のみであった。P.1の南には焼土が検出され住居址内において火の使用があったことを示している。出土遺物は土師器の小片がわずかと、覆土中から特殊磨石(第24図-1)が検出された。平安時代後期の住居址と推定する。



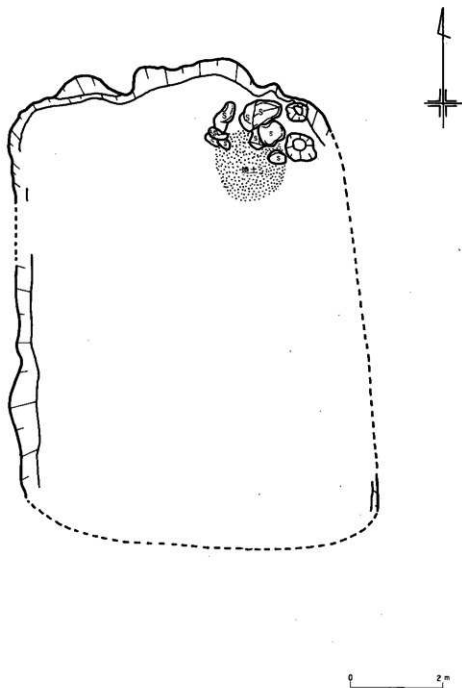
第10図 第2号住居址実測図

3) 第3・5・6号住居址 (第11図)

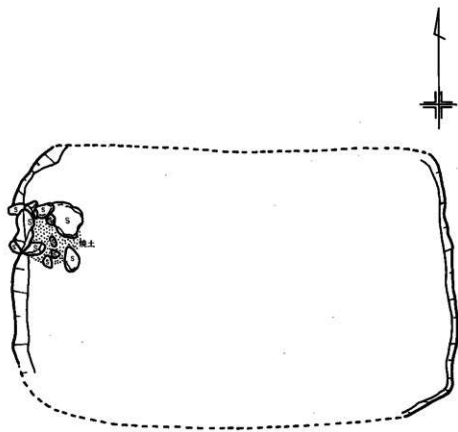
調査地中央やや北寄りのG・H-11・12グリッドを中心に3つの住居址が切り合って確認された。第3号住居址のカマドが最初に検出され、続いて第5号住居址のカマドの検出であった。調査の途中段階では、1つの住居址に2つのカマドを持つのではないかと考えていたが、精査に入り、切り合っていることが判明した。第3号住居址の竪穴部分は第5号住居址によって切



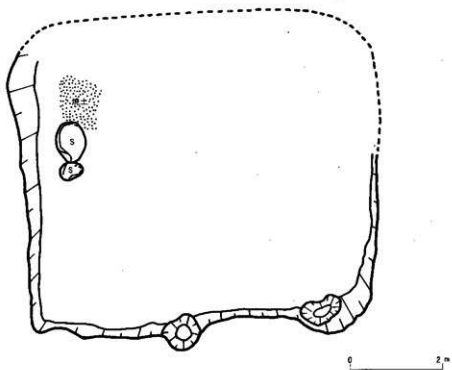
第11図 第3・5・6号住居址及び土埴VI実測図



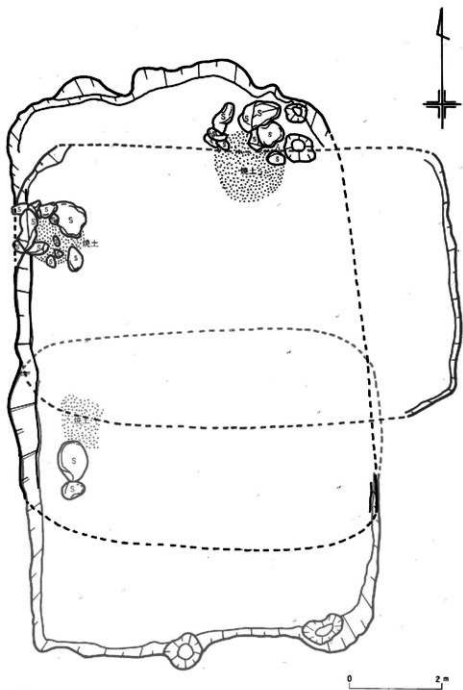
第12图 第3号住居址实测图



第13图 第5号住居址实测图



第14图 第6号住居址实测图



第12图 第3号住居址实测图

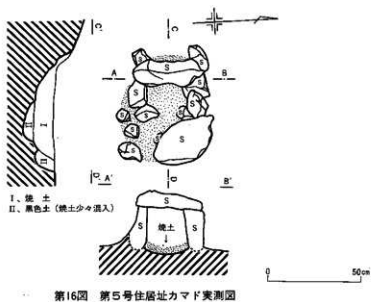
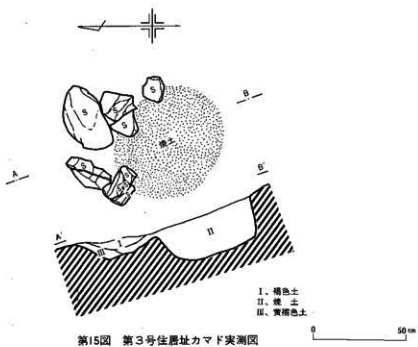
られており、第5号住居址は第6号住居址を切っている。これによって3軒の3号住居址は第6号住居址が最初に構築され、続いて第3号住居址、最も新しいものが第5号住居址である。第5号住居址は東西4.7メートル、南北推定3.4メートルの隅丸長方形を呈している。北壁は第3号住居址のカマドの袖部前面を切り取っており、槩がカマドと直交するように通っている。カマドは図版2に見るごとく比較的良好な遺存状態であった。両袖の中央には偏平な石を立て芯石にしておき、その周囲をロームや粘土で固めている。天井石は袖石の上にまたがり、煙道部を形成している。カマドの軸線は竪穴の軸線の方角と一致している。

第3号住居址はカマドを北壁の中央やや東寄りに構築しており、カマドは前述のごとく第5号住居址の北壁によって前半分を削り取られている。状況は図版2に見るように、天井部は崩壊しているが、袖石はしっかりと張り込んで立てられている。プランは東西推定3.6メートル、南北推定4.8メートルの隅丸長方形を呈している。

第6号住居址は2つの住居址によって切られているため、カマドは火床部のみで、その形跡は全く留めていない。プランは北壁を除いてほぼ検出されたが、東壁は傾斜下面にあたるため壁高がわずかであり、プランは不確実である。東西3.8メートル、南北推定3.2メートルの隅丸長方形を呈している。床面は全体的にあまり堅くはなっていない。3軒の住居址を発掘していくつかのことに気付いた。まず3軒の住居址が共通して西壁を使用していることである。2・3回目に住居址を形成しようとした時、まず竪穴部分の掘削を進める段階で第6号住居址の壁跡が現われ、そこで止めたためと考えられる。それによって偶然にも西壁が共通したものと推測される。次にカマドの位置であるが、長方形の短辺中央より右側の角に近い所ということが全く共通している。そして3住居址共にプランが同様な形を呈している。

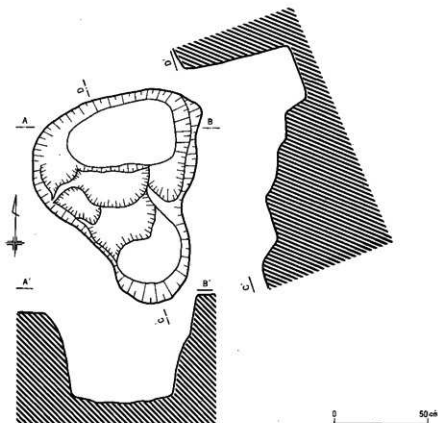
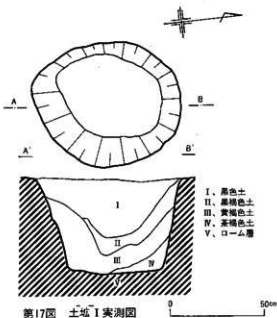
次に主柱穴や貯蔵穴であるが、住居址の切り合いが多く、どの住居址に伴うものか判然としない。

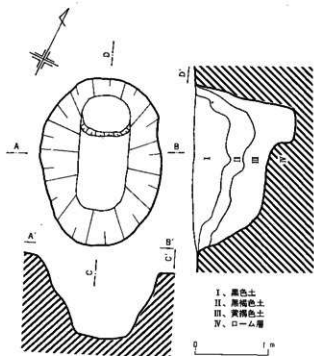
以上平安時代の6か所の住居址について記したが、この小台地上においては2か所に住居が集中した感じである。自然地形や諸条件を考えると住居址の検出された位置が好適地であったと考えられる。いずれも平安時代後半の住居址である。



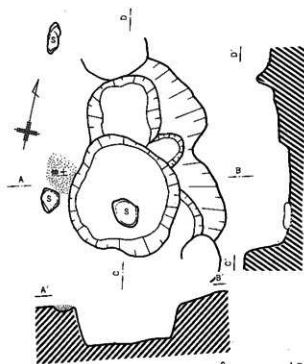
2 土 塚 (第17~20図)

末広A遺跡における土塚の確認は6ヶ所であった。調査地の北西に2ヶ所、D-I、D-IIに位置し、H-1号住居址の周囲に3ヶ所、H-5号住居址内に1ヶ所である。D-Iはほぼ円形を呈し、約70cmの深さを計る。ローム層中に掘り込まれており、覆土は四層を確認することができた。D-IIはD-Iの西側に並び不整形円形を呈している。壁も南側は階段状になっており共に貯蔵穴のように感じられる。2つの土塚共にわずかではあるが縄文時代前期の土器片が





第19図 土埴Ⅲ実測図



第20図 土埴Ⅵ実測図

検出された。

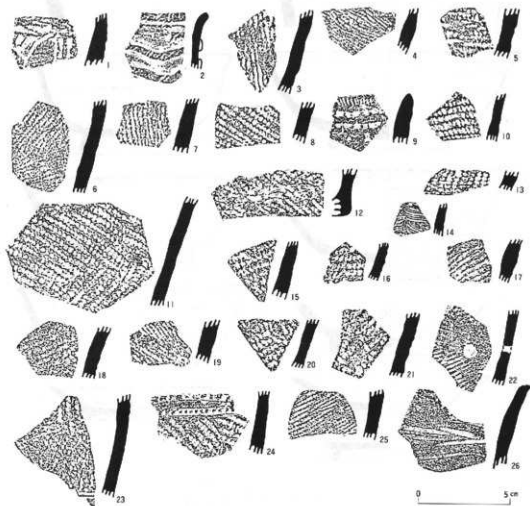
第19図は土埴Ⅲの実測図である。楕円形を呈し底が二段になっている。ローム層を掘り込んであり壁は部分的ではあるが、敲いてあり、調整の様子を窺うことができる。覆土は三層を確認できるが、その中には1点の遺物も含まれていなかった。D-Ⅳ、D-Ⅴも同様な状況の土埴である。D-Ⅳ及びD-ⅤはH-1号住居址によって明瞭に切られている。覆土の状況から縄文時代の土埴(貯蔵穴)のように推測できる。

D-ⅥはH-5号住居址のほぼ中央に位置している。この土埴は住居址発見当初から落込みとして確認されていたもので、覆土中から第23頁図示す大形石匙が出土している。径1.4m前後の楕円形を呈し壁面及び床面共に敲いて整えている。床面は平らで中央やや南寄りに石皿が検出された。(図版3参照)
また床面からは縄文前期関山式土器片が数点出土している。(第21図11参照)

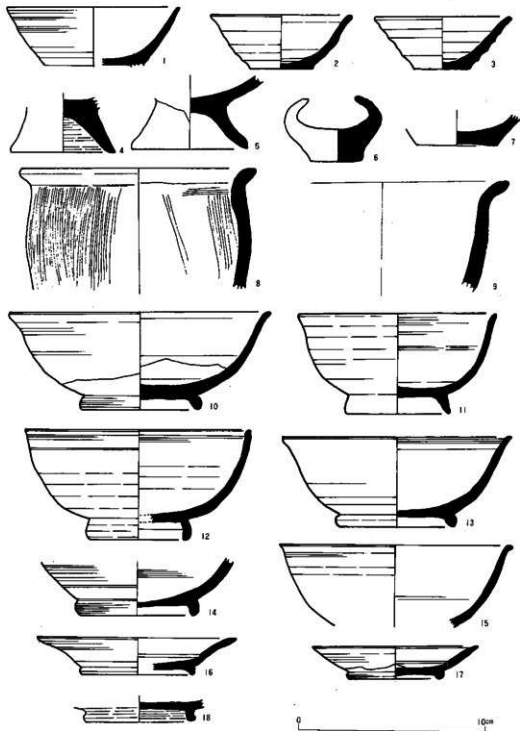
第3節 遺 物

1 土 器 (第21図)

第21図に示す拓影は遺跡内より出土した縄文時代の土器片である。早期末から前期中葉にかけての一群である。1は胎土中に繊維を含み、竹管を用いて施文している。土坑1から出土したものである。2は表面採集によるものであるが、赤褐色を呈し器厚が4ミリほどの薄手である。口縁はゆるやかな波状を示すものと思われる。文様構成は細い粘土紐を平らにしてはりつけて隆帯文とし、この上に貝殻条直文を施している。非常に堅く焼かれており、他の土器片とは異なる感じを受ける。町内においては南小河内上の平遺跡と上の林遺跡の2か所から同類



第21図 土器拓影実測図



第22图 出土土器·陶器实测图

の土器片を確認している。3～6は土壇Ⅰから出土したものである。前期の黒浜式土器で茶褐色を呈し、石英粒を多量に含んでいる。8～14は土壇Ⅳから出土したものである。他は関山式土器で文様構成は羽状縄文で「左・右捻りの単節縄文」である。色調は茶褐色及び黄褐色を呈する2類になる。以下は各住居址内の調査及び発掘中に発見したものである。24は縄文のほかに半割竹管を用いて連続刺突文を横走させた前期黒浜式の土器である。26は諸磯A式土器の口縁部であり、胎土は非常に密で細かい石英粒と雲母を含んでいる。縄文土器は土壇を中心に出土しているが、小片のみであった。時代的には早期末から前期の中ごろにかけてのものがほとんどであり、その時期に本遺跡周辺で人々の生活が繰広げられたことを示すものである。

第22図は本遺跡から出土した土師器及び灰釉陶器である。1～3は土師器の坏であり、1は高台が欠損した痕跡が見られる。2・3は赤褐色を呈する小形の坏で体部はほぼ直線的に開き、立ち上がりは急である。回転糸切りによる切り離しのままになっている。4・5は高台付坏の高台部であり、⁸/₈の字状に開いた高台部である。破損した部分において坏部との接合状況を観察することができる。6は土師器の耳皿である。8・9は甕である。口縁部が⁸/₈の字状を呈して立ち上がっている。肩部の張りは少なくなりそのまま底部に向っている。内面は櫛状工具で整形され、外面は細かい刷毛目整形が見られる。この他にも土師器として、羽蓋の小片が確認された。1及び6は第3・5号住居址の覆土中から2～5及び7～9の土器は第1号住居址内のピット内や床面から検出したものである。次に灰釉陶器であるが、図の16・18の2点は第3号住居址のカマド周辺から出土したものである。10～15は高台付碗であるが、体部の立上がりが高台部に相違を見ることができる。16・17は段皿である。土師器・灰釉陶器共に11世紀代のものである。(柴)

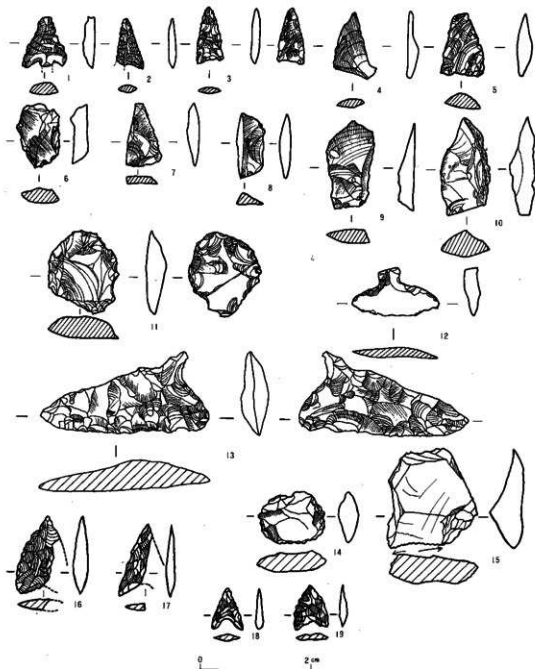
2 石器 (第23・24図)

本調査において石器の出土総数は25点である。このうち黒曜石を原料とした定形石器(石鏃・石匙等)が9点、不定形石器(スクレイパー等)が10点で、出土石器全体の七割以上である。

第23図における1・2・4・6は磨石である。表面はなめらかな自然石の一部に磨滅痕を残すもので、一部分を連続的に使っており、その部分が強く磨滅している。なかには敲きに使用した痕跡を見ることもできる。石質は砂岩が多い。5は砥石として使用されたものであり、三面が磨滅して湾曲している。金属を砥いだものと思われる。本遺跡の住居址内から金属器が何点か出土しているが、これらの研磨に用いられたものであろう。密度の高い砂岩製である。

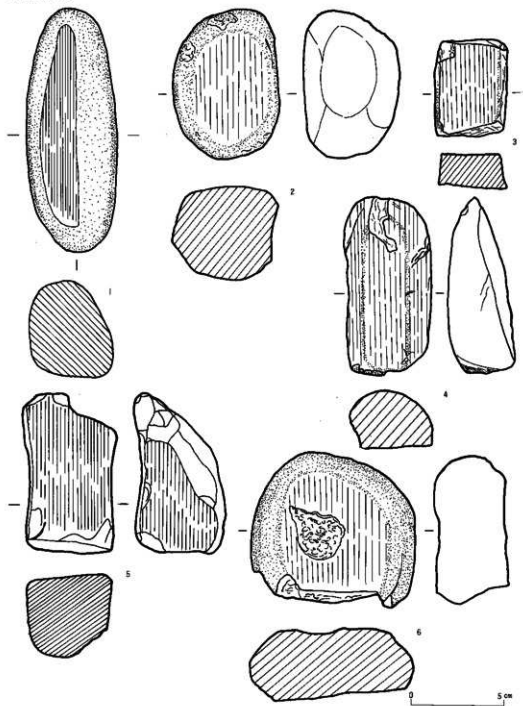
第24図の1～3及び16～19は石鏃である。1～3は本調査における表面採集資料であり、他は既出遺物である。1は有柄鏃と呼ばれるものであるが、付根から欠損している。2・3は比較的細身の石鏃であり、丁寧な剥離が施されている。16・17は大形の石鏃であるが、いずれも

片側が欠損している。先端は鋭く光り、側縁も鋭い刃部を形成している。両脚間の挟りはそれほど深くなく、全長3cm余の大形石鏃である。18・19は小形の部類に入り、全長1.6cm程度である。次に12・13は石匙である。2点共に刃部を底面に備えた模型で、12は上部のつまみ部の挟りが顕著であるが、13はそれほどはっきりしない。刃部は両面から剥離が加えられ、両刃状



第23図 出土石器実測図一

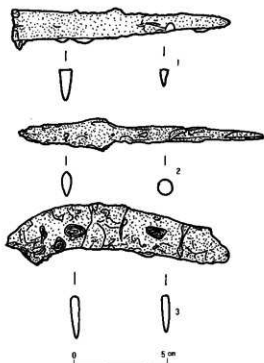
を呈し比較的厚く仕上げられている。4～11及び14・15はスクレイパーである。11・14は刃部をはば全縁に施している。他は一边又は二辺を刃部として使用している。いずれも縄文時代の石器である。



第24図 出土石器実測図-2

3 金属器 (第25図)

図に示した3点の鉄器は第1号住居址内から出土したものである。1・2は西壁寄りのピット2の中から検出され、2点共に同一レベルであった。1は刀子であるが刃部の中間から折れ先が欠損している。茎の長さは6.5cmを測り、刃部の棟は直線で、造りは平棟平造形式で両刃になり、断面形状はクサビ形になっている。完全ならば全長20cmほどになるものと推測される。2は完形の平根鐵である。茎部の長さ9cm、刃部は6cmを測る。茎部は断面円形を呈し、発見当初は周囲に木質が錆状になって残っていた。刃部は平らに仕上げられ、両縁辺はほぼ直線で先端部に向い、両刃で鋭い角度を呈している。3は鐵の一部ではないかと推測したが、決定はし難い。現長14cmほどであるが、左側の欠損部は下に曲るものと考える。全体的に薄く仕上げられており、内側に刃部があるように感じられるところから鎌状の刃物であろう。3点共に住居に直接結びつく遺物である。



第25図 金属器実測図

圖 版



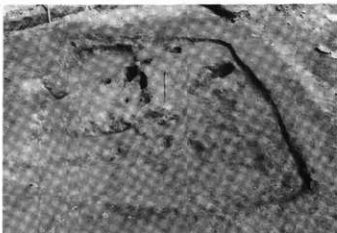
遺跡全景



遺跡地より峠を望む



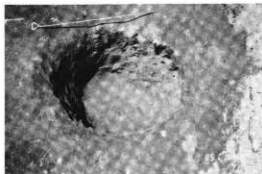
第1·4号住居址



第2号住居址



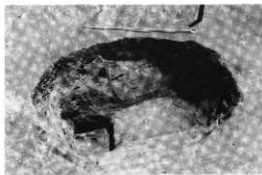
第3·5·6号住居址



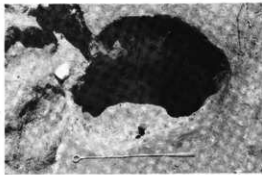
土坑 I



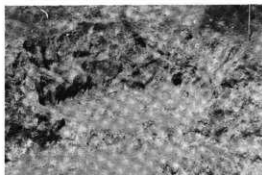
土坑 II



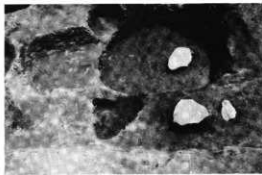
土坑 III



土坑 IV



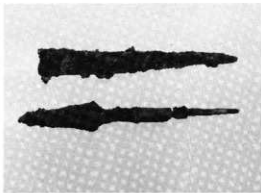
土坑 V



土坑 VI



图版 IV 遺物出土状況



图版 V 出土遗物



神 事



図版VI 調査状況

落合 A 遺跡

本文目次

本文目次

挿図目次

図版目次

第I章	調査地の立地	23
第1節	位置	23
第II章	発掘調査の結果	24
第1節	調査結果の概要	24
第2節	遺構	25
1	住居址	25
第3節	遺物	29
1	土器	29
2	石器	31
第III章	発掘調査のまとめ	32

挿 図 目 次

落 合 A 遺 跡

第1図	落合A・B地区地形及び調査範囲図	23
第2図	遺構全測図	24
第3図	第1号住居址実測図	25
第4図	第1号住居址カマド実測図	26
第5図	第2号住居址実測図	27
第6図	第2号住居址カマド実測図	27
第7図	C-10グリッド地層状況図	28
第8図	C-30グリッド地層状況図	28
第9図	縄文土器拓影	29
第10図	出土土器・陶器実測図	30
第11図	石器実測図	31

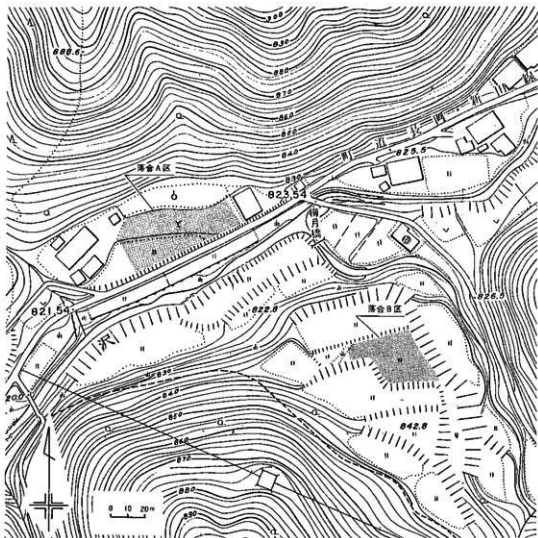
図 版 目 次

図版 I	遺構状況
図版 II	カマド状況
図版 III	遺物出土状況
図版 IV	出土遺物
図版 V	調査状況

第 I 章 調査地の立地

第 1 節 位 置 (第 1 図)

長岡と南小河内の間に流れ出す沢川は長岡新田の中心地である落合地籍で二つに分れている。長岡区から約 3 kmほど上った地点である。上流から流れ出た川が落ち合う場所であるためできた地名であろう。以前は小学校の分校が位置しており、新田全体の中心地であった。遺跡は川の合流点よりわずか下流の右岸に存在し、標高は 826 m 前後を示している。前述の末広地籍より 80 m 程度下っている。



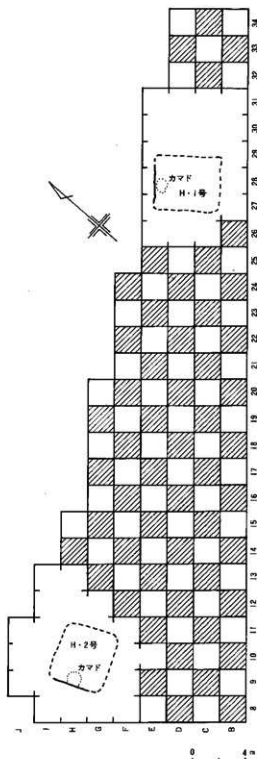
第II章 発掘調査の結果

第1節 調査結果の概要

昭和59年度における確認調査時において、遺物の出土が認められていたため、その範囲を中心に調査を実施した。表土を平均20～30cm程度ブルドーザーによって耕し、その後においてグリッドの設定を実施した。

(第2図参照)

調査地区において西南寄りの約半分の面積は礫と川砂の堆積で、川原同然の状況であった。それはある時期における沢川の氾濫と山からの土砂の崩落によるものである。北東寄りの残りの部分は花崗岩の風化した土砂の堆積が2m余に及び、土層状況に変化が無く遺構の検出は大変困難な状況であった。グリッド発掘を進めていく過程においてE-28グリッド壁面に焼土が確認され、拡張作業によってカマドの検出に至った。これを第1号住居址とする。続いてI-9グリッド内に同じくカマドが検出され、これを第2号住居址とする。確認調査時よりこのような川原同然のような中には遺構の存在は無いものと推定していたが、平安時代の住居址が2ヶ所確認できたことはおどろきであった。



第2図 遺構全測図

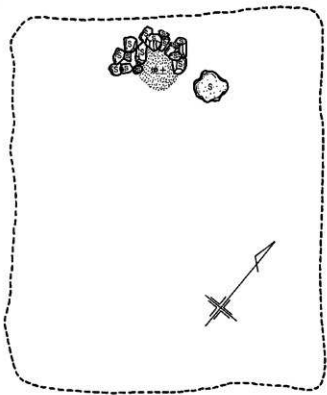
第2節 遺 構

1 住居址

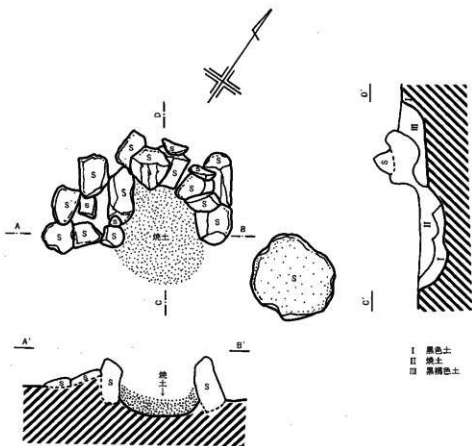
1) 第1号住居址 (第3図)

E-28グリットの壁に現われた焼土はカマド前面の火床部の一部分であった。ここを拡張して平面的な精査を実施した結果、カマドを北壁に位置する住居址であることが判明した。崩落によって堆積した花崗岩の黒色土の中に掘り込まれた竪穴であるため、プランや柱穴等全く判断がつかない状況であったが、遺物の出土範囲や床面と予想される範囲などにより、ほぼ推定することができた。それによると南北5メートル、東西4.2メートル前後と考えられる。

カマドは住居址の軸線とほぼ合い、両袖の中には芯になる偏平な石を立てて補強している。火床はやや凹地になっており、焼土が約10センチ堆積していた。繰り返し使用したことを物語っている。カマド右側には直径40cmに及ぶ平石が据えられている。上面はなめらかであり、調理等に使用されたものと考えられる。遺物はこの平石の右側を中心として床面上に出土している。平安時代後期の住居址である。



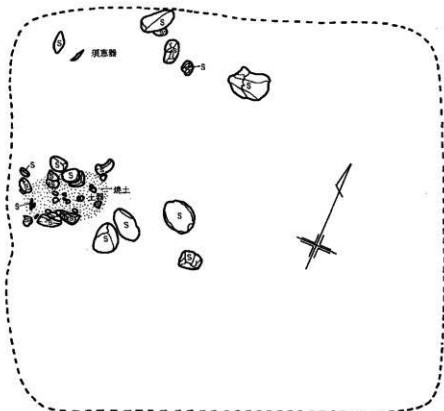
第3図 H1号住居址



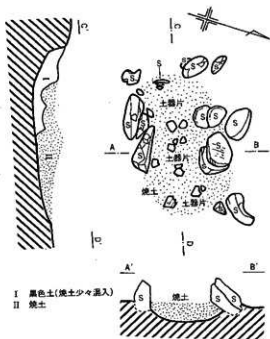
第4図 第1号住居址カマド実測図

2) 第2号住居址 (第5図)

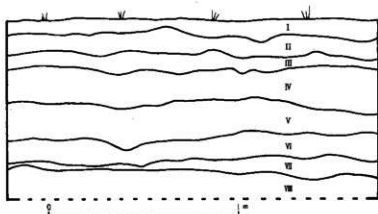
調査地北西の角に検出された住居址である。川原のような石間の中に構築された住居址で、そのプラン確認は困難な状況下にあった。第1号住居址同様推定によるものであるが、一辺4メートル余の隅丸方形を呈する住居址と考えられる。カマドは偏平な川原石を立てて袖を形成しており、やや長い火床部を有しており、火床部からは大型の土師器片が数片出土している。また北西の角に、壁に寄りかかって灰釉塊の出土も見られる。柱穴・貯蔵穴等の内部施設は発見することはできなかった。



第5図 第2号住居址実測図

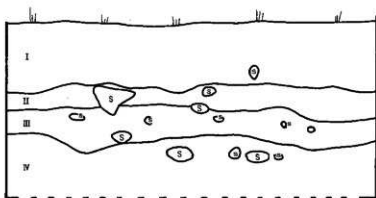


第6図 第2号住居址カマド実測図



- I 表土 (花崗岩の風化したざらざらの土)
 II 褐色土 かたい (S)
 III 褐色土 (S)
 IV 黒褐色土・小石を含む
 V 黒色土・細かな砂を含む、やわらかい
 VI 砂層、非常に細かい砂
 VII 礫層、水が出て来る
 VIII ローム

第7図 C-10グリッド地層状況図



- I 赤黒色土
 II 赤褐色土、礫を含む
 III 黒色土、やわらかい
 IV 黒色土、かたい、礫を多く含む

第8図 C-30グリッド地層状況図

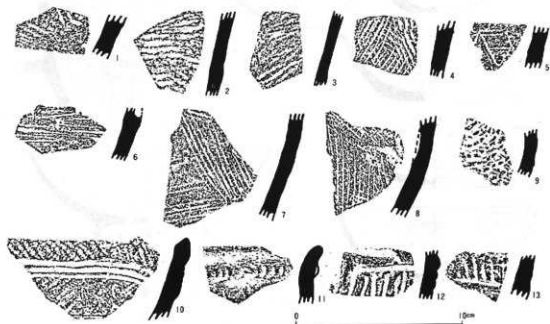
第3節 遺 物

1 土 器 (第9・10図)

第9図は遺跡内より出土した縄文土器片の拓影である。1～3は縄文前期末諸磯A式の土器である。4～8は諸磯C式土器で半割竹管による平行沈線が施されている。黄褐色を呈する土器片は密な胎土と焼成良好な状況である。9は前期終末期の土器で関東の「十三菩提式土器」と呼ばれるものである。平行沈線の地文に細い隆帯をはりつけ、その隆帯上を半割竹管で押えながら引いている。土器の内面を丁寧に仕上げている。焼成はきわめて良好である。10は中期初頭の土器口縁部で、口縁はゆるやかな波状を呈している。口縁と平行して3本の沈線が横走している。黒褐色の土器は胎土中に多量の雲母を含み、土器表面には金雲母が光って見える。12・13は中期中葉井戸尻期の土器片である。

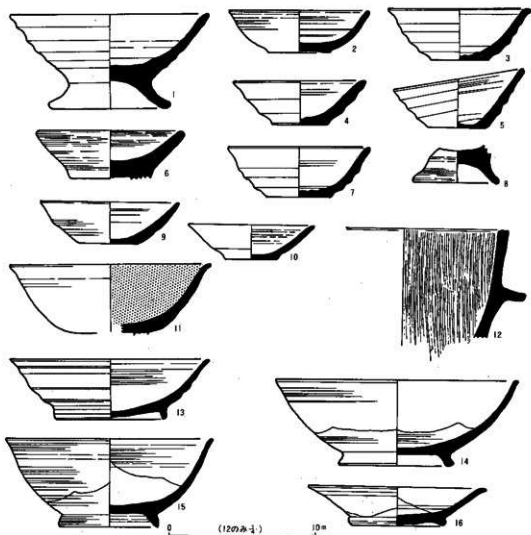
本遺跡における縄文時代土器は前期末から中期中葉までのものが見られる。いずれも遺構を伴うまでにはいかないが、この谷合い深くにまで縄文人が入ったことを示すものである。

次に平安時代の土器・陶器であるが、第10図に示すように実測可能な16点を図示した。14を除いてすべて第1号住居址から出土したものである。1・6・8・11は高台付坏であり、6・11は高台の部分に欠損している。8は逆に坏部が無く高台部だけを残している。高台が大きく「8」の字状。に聞き安定を与えている。11は内面を黒色処理した内黒土器である。2・3・4・

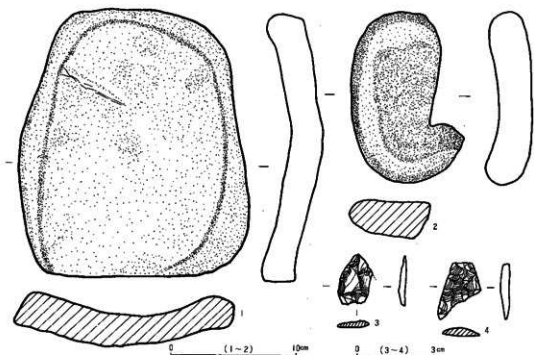


第9図 縄文土器拓影

5・7・9・10はいずれも坏であり、体部は直線的に開くものと、内湾気味に開くものとに分れ、口縁端がわずかに外反するものもある。底部は第二次整形をおこなわない回転糸切りによる切り離しのままのものが多く、色調は黄褐色ないし赤褐色を呈し、胎土中には多量の金雲母と石英を含んでいる。12は羽釜の一部であり、口縁部はほぼ直立している。銕は口縁から4センチ下かって1.8センチほどの銕が付けられている。銕は直横よりわずかに下がり気味である。外面は筥削り、撫で、内面は櫛状工具で縦に整形した痕を残している。赤褐色で、焼成は良好である。次に13~16は灰釉陶器であり、13は高台付坏である。14・15は碗、16は段皿である。土師器、灰釉陶器共に11世紀のものと思われる。



第10図 出土土器・陶器実測図



第11図 石器実測図

2 石器 (第11図)

本遺跡で検出された石器は4点と少ないが、これは平安時代が中心の遺跡であった為と考えられる。また遺跡内の大半は沢川の氾濫によって礫が堆積している状況であり、全体的に遺物の検出は困難であった。

図の1・2は石皿である。1は楕円形の平石の片面を打ち欠いて素形を作り、次に研磨して全面をなめらかに仕上げている。比較的荒い砂岩を用いている。

2も石皿であるが一部が欠損している。手に持って使用できるくらいの大きさであり、現在の「おろし板」のような使い方をしたものであろうか。砂粒を含んだ砂岩で、表面はきわめて目の荒い状況である。3・4は黒曜石を原料とした石鏃である。4は先端と片脚を欠いているが丁寧な剥離面を示し、両縁辺は鋭く作り出されている。

第三章 発掘調査のまとめ

(末広A・落合A遺跡)

長岡新田の谷において発掘調査を実施して二年目に入った。昨年(昭和59年度)において3ヶ所の確認調査を行なった。この調査はいつでも沢川に位置する箕輪ダム建設におけるものである。本年度は2ヶ所の本発掘(末広A遺跡、落合A遺跡)と4ヶ所の確認調査を実施した。

昭和60年6月27日より8月8日の間において緊急発掘調査を実施した。確認調査においては後述してあるので、ここでは本発掘ヶ所の2遺跡について要約する。

1、末広A遺跡

- 1、本遺跡は、沢川上流の日向地籍に入った末広地籍の中心部に在り、沢川右岸の小支流によって開析された、小さな台地上に位置している。遺跡の範囲は約1,500㎡余を含め、主として平安時代後期の集落址が展開している。
- 2、発掘調査はそのほぼ全面に及び、竪穴住居址が複合した状態で発見された。
- 3、発見された遺構は次の通りである。

縄文時代土壇6ヶ所(うち3ヶ所は前期)

平安時代後期竪穴住居址6軒(うち2軒はカマドと住居址の一部)

4、検出された遺物

縄文時代土器片 数十点

平安時代陶器 多数

縄文時代石器 23点

発掘調査の詳細については、前述の通りであるが、調査の経過及び整理を通じて得られた部分について少し触れてみたい。

遺跡の時代的流れとしては、既出の遺物の中に小形瓜形撞器が確認されている。縄文時代も最も早い時期において人々が、新田の谷に入り込んだことを物語っている。石器の内容において、諏訪との関係を考えなければならない。

次に縄文早期になり、量は少ないが土器が出土している。終末期に位置付けられている天神山式の土器である。続いて前期の関山式黒浜式・諸磯A式土器の出土を見ている。これは土壇内から検出されたものである。中期に入り初頭に梨久保式、中葉の井戸尻式などの土器片がわずかに確認されている。その後における遺物は見られず、11世紀の平安時代後期になって、住居を設定した生活をしている。中世に至って、少量ではあるが遺物も見られる。そして近世に至って現在まで住んでいた人々の直接の祖先に続いたものと考えられる。

このように出土している遺物を見る時、縄文時代前期の中ごろにおいて一時期生活があったことが考えられる。住居址の確認はされていないが、土城は3ヶ所検出された。

次に平安時代後期（11世紀）ごろには住居址を設けて生活している。このような山中に入り込んだ人々は生活の基盤を何に求めたのであろうか。水田経営を主に考えた時、地形的にも気候的にもあまりにも条件が悪いように思える。畑作における生活でも特に焼畑耕作は都合よく実施できる。また山に依存した場合、牧を考える場合、等々を推測することができる。いずれを推定する場合においても、末広のような地理的条件ではわずかな規模でしか実施できなかったであろう。次にこの場所は峠越えをして諏訪に通じている。諏訪への主要交通がこの谷を利用していたと考えると、それに関係する住居とも推定できる。いずれにしても山深い場所に入って生活した人々は四季おりおりの自然と共に生活したものであろう。

次に小台地上において、住居を設定した場所が、2ヶ所に限られている。ほとんど同一場所へ3～4回共に住居を建てているのである。1,500㎡ほどの小台地上においても、地形や、自然条件を考えて住居を設定する場所を決めている。出土している灰釉陶器や土師器を見ても、時期的には変化が感じられない。同一場所へ引き続いて住居を建て換えたものと考えられる。

2、落合A遺跡

沢川が左右から合流する地点を落合地籍と呼んでいる。長岡から約3kmほど上った場所である。右岸の南面する傾斜地約1,000㎡ほどが、遺物の散布している範囲である。調査の内容は前述のようであるが、そこに示した通り、沢川と、背後の山からの土砂の崩落で、遺跡と目される場所は、川原同然の状況であった。その中において、平安時代後期（11世紀、末広A遺跡と同時期）の住居址が2ヶ所確認された。川の影響を心配しながら住居を設定したものであろう。人々の生活についての推測は、前述の末広A遺跡と全く同様に考えられる。他の遺物として、縄文中期・中世及び近世陶器などが少量見られる。

2つの遺跡の発掘を終り今後考えなければならない問題点などいくつか見られるが、今後共に発掘調査が続いて計画されているので、それ等の遺跡と平行して検討したい。

発掘調査及び報告書執筆にあたりご協力をいただいた伊那市教育委員会飯塚政美氏、また調査にご協力下さいました作業員の皆様方から謝意を表する次第です。 （柴登巳夫）

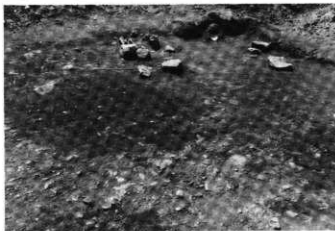
圖 版



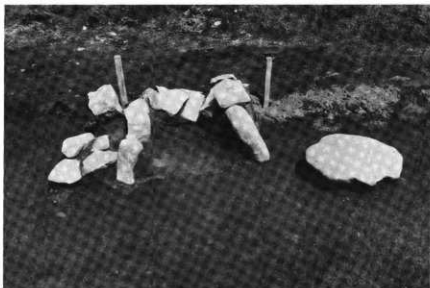
調查地近景



第1号住居址



第2号住居址



第1号住居址カマド



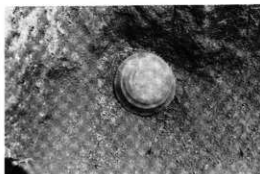
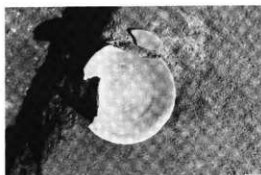
第2号住居址カマド



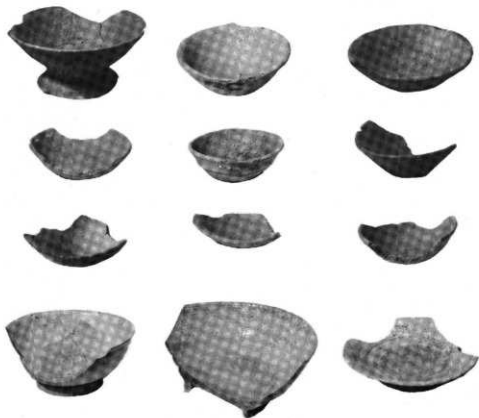
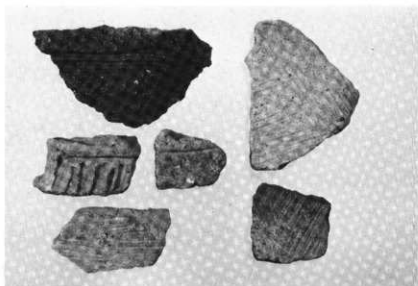
グリッド状況



グリッド地層状況



図版Ⅲ 遺物出土状況



第IV図版 出土遺物



図版V 調査状況

確認調査

1. 末広B地点
2. 落合B地点
3. 羽場垣外地点
4. 所開橋南地点

確 認 調 査

本文目次

挿図目次

図版目次

1. 末広B地点	34
第1節 位置	34
第2節 確認調査の結果	35
2. 落合B地点	38
第1節 位置	38
第2節 確認調査の結果	39
1. 調査状況	40
2. 出土遺物	40
3. 羽場垣外地点	41
第1節 位置	41
第2節 確認調査の結果	42
1. 地層状況	43
2. 出土遺物	43
4. 所開橋南地点	44
第1節 位置	44
第2節 確認調査の結果	45
確認調査のまとめ	46

挿 図 目 次

(末広B地点)

第1図	地形図及び確認調査範囲図	34
第2図	グリッド配置図	35
第3図	グリッド2、地層状況図	36
第4図	グリッド3、地層状況図	36
第5図	グリッド5、地層状況図	37
第6図	グリッド10、地層状況図	37
第7図	グリッド11、地層状況図	37

(落合B地点)

第1図	地形及び位置図	38
第2図	グリッド配置図	39
第3図	遺構配置図	39
第4図	出土土器拓影	40

(羽場垣外地点)

第1図	地形及び位置図	41
第2図	グリッド配置図	42
第3図	グリッド地層状況図	42
第4図	出土遺物実測図	43

(所開橋南地点)

第1図	地形及び位置図	44
第2図	グリッド配置図	45

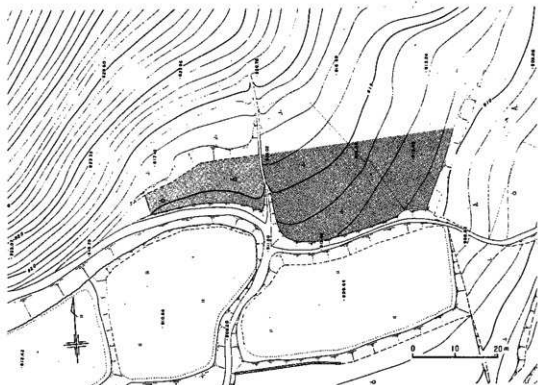
図 版 目 次

図版Ⅰ	末広B地点調査状況
図版Ⅱ	末広B地点調査状況
図版Ⅲ	落合B地点調査状況
図版Ⅳ	羽場垣外地点調査状況
図版Ⅴ	所開橋南地点調査状況

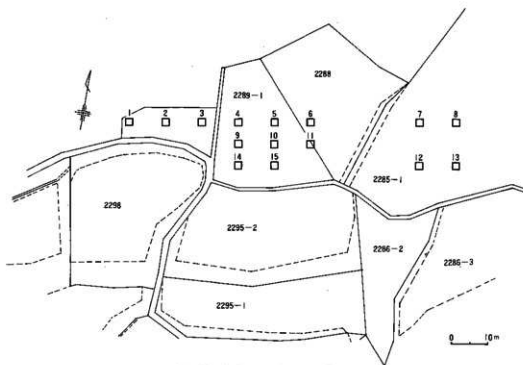
1. 末広 B 地点

第1節 位置 (第1図)

発掘調査を実施した末広A遺跡と地続きの場所である。遺跡北側に小さな沢が流れ出している。沢の水を利用して両側には水田が開けており、水田を作れない山際に傾斜地ながらわずかな畑が位置している。山裾に長細く続いている4枚の畑を確認調査範囲と定めた。南面する傾斜地で標高は915m前後を示している。



第1図 末広B区 地形図及び確認調査範囲図



第2図 末広B グリッド配置図

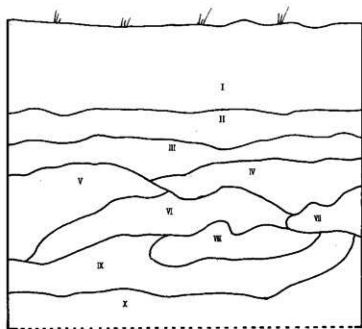
第2節 確認調査の結果

1) グリッド地層状況

第2図は確認調査のために設定したグリッド配置図である。4 の畑の中に15ヶ所のグリッドを設定した。実測図第3図にグリッド2の状況を示してある。ローム層まで180cm余ときわめて深く、山の南斜面の土砂の流出堆積状況を見ることができる。グリッド1も同様に深い堆積をしている。遺物は全く見られない。第4図はグリッド3の土層状況である。東壁を観察したもので、南面する傾斜堆積状況を見ることができる。グリッド2とわずか8mほどしか離れていないのに土層の相違におどろく、これは地形のうねりによるものであろう。

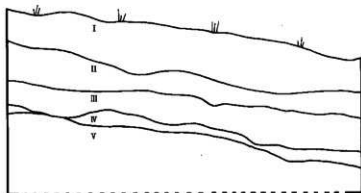
第7図はグリッド11の地層状況図である。傾斜地にできたテラス状地形の端部に近い場所である。堆積状況は表土とほぼ平行しており、ローム面まで約80cmの深さを示している。石はほとんど見られず、やわらかな黒褐色土が多い。

末広A地区と小沢をはさんで対面するこの小テラス状地形は、南面する傾斜地であり、遺跡の存在を推測したが、15ヶ所のグリッド内からは、遺構はもちろん、一片の遺物も発見することは無かった。末広の地に目を付けた原始・古代の人々は末広A地区を選び、そこを生活の中心地としたのである。



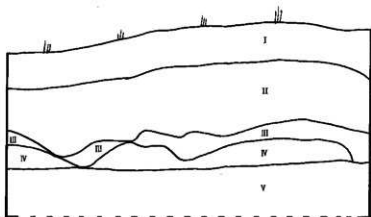
- I 赤土、茶褐色土
- II 黒色土、ややかたい
- III 茶褐色土
- IV 黄褐色土
- V 黄味の強い褐色土
- VI ロームを含む黒褐色土
- VII ロームの多い褐色土
- VIII ロームを含む茶褐色土
- IX 黒土 (II層より明るい)
- X ローム層

第3図 グリッド2地層状況図



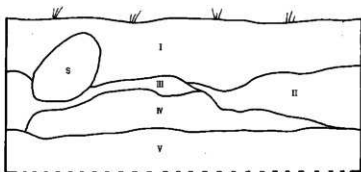
- I 赤土
- II 黄褐色土
- III 茶褐色土
- IV ローム混り茶褐色土
- V ローム層

第4図 グリッド3 地層状況図



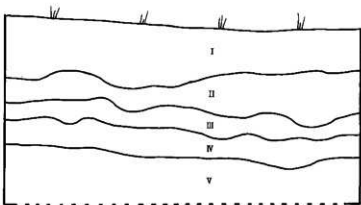
第5図 グリッド5 地層状況図

- I 表土
- II 黒色土
- III 黒褐色土
- IV 黄褐色土
- V ローム層



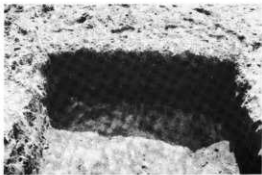
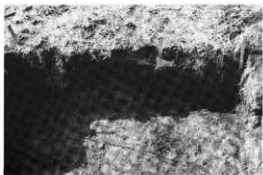
第6図 グリッド10 地層状況図

- I 表土
- II 黒褐色土
- III 褐色土
- IV ローム混り褐色土
- V ローム層



第7図 グリッド11 地層状況図

- I 表土
- II 黒褐色土
- III 褐色土
- IV ローム混り黄褐色土
- V ローム層



図版 I 末広B地点グリッド状況

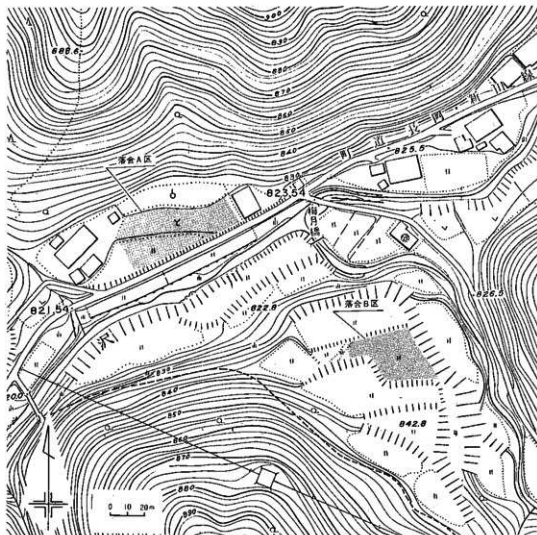


图版 II 末広 B 地点調査状況

2. 落合 B 地点

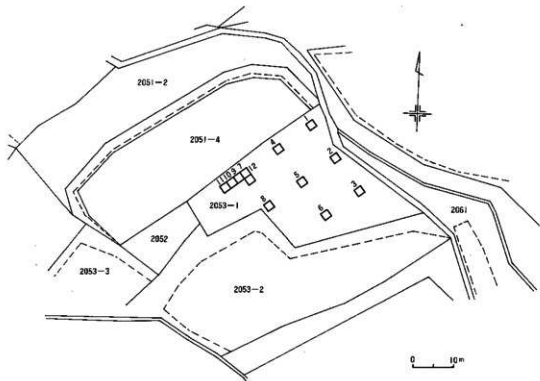
第1節 位置

沢川が二つに分かれて右手に入ると日影入り地区になる。前述の落合A地点から約200mほど上流の右手高台が落合B地点である。小さな谷川から水を引き数枚の水田が開かれている。そのほぼ中ほどに4アール余の桑畑が位置している。ここを落合B地点とし、確認調査地とした。標高は840m前後を示している。

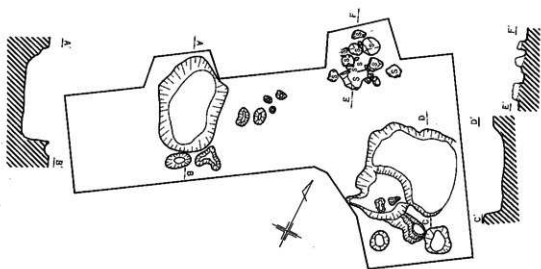


第1図 地形図及び調査範囲図

第2節 確認調査の結果



第2図 グリッド配置図



第3図 遺構配置図

1. 調査状況

第2図は地形及びグリッド配置図である。約40アールの面積の中に12ヶ所のグリッドを設定した。1～6のグリッドの範囲は桑畑であり、ローム層が出るまで手掘りで調査したが、遺構・遺物の検出は見られなかった。グリッド1・4は表土下30cmほどから約1m余の間、花崗岩の風化した土が堆積し傾斜面を流れたことが見られる。

7グリッドの調査を進める段階において縄文式土器片と配石及び土壇の検出に至った。またグリッド10においても土壇の検出を見た。それらを第3図に示した。配石は拳大から枕大まで15・6個からなり、明らかに人為的な配石の状況を呈している。配石の下部は調査しなかったが、落込み状を呈しているようにも見られる。次に7グリッド内に検出された土壇であるが、覆土中から縄文式土器片を数個検出している。70×100cmほどの楕円形を呈しているが埋葬用と考えるのが適当であろうか。この地点は遺構・遺物の発見があったため、本発掘調査が必要である。



第4図 出土土器拓影

2. 出土遺物

第4図 1～1 はグリッドから出土した土器片であり、遺構とは何んら関係がないと思われる。1～4 は外面に低い隆帯を数条横位に貼り付け、その上に刻目を押捺し、内面には滑らかな波状文が施されている。少量の長石、雲母、石英を含み、焼成は普通である。色調は全般的に赤茶褐色系を呈す。東海地方に盛隆した上の山式から天神山式過渡期の土器と推測される。8 は外面に縦位の波状文が走っている。土器の容態、その他諸々の事柄は1～4 とほぼ同一である。5・6、9・10 は外面に貝殻条痕文が無数に配されている。黒褐色(5、9)、赤褐色 10、明白褐色 6 を呈し、焼成は普通。5、9・10 は多量の雲母、長石、石英を含んでいる。4片はともに多量の繊維を含み茅山系統の系統と思われる。

7・11 は外面にへら先による沈線を交叉状に施し、意匠面を高めている。7 は黒褐色、11 は黄褐色を呈し、多量の雲母、長石を含み、焼成は普通。縄文中期初頭の一派と思われる。

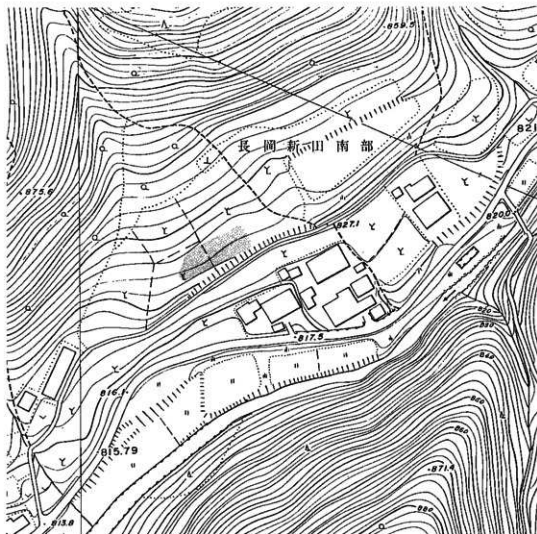


图版 III 落合B地点調査状況

3. 羽場垣外地点

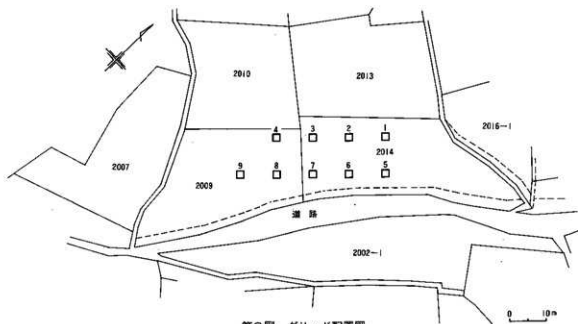
第1節 位置

前記の落合遺跡の下流約200mに位置している。沢川の右岸は左岸に比べてやや平地が多く、人家や耕地が見られる。羽場垣外地点は川に平行して数十メートル余の平地があり、北側の背後が10mほどの急な土手になっている。この土手の上に南面する傾斜面に畑が開けている。傾斜は3度前後と思われる。この位置を確認調査地、羽場垣外地点とした。標高は832m前後を示している。

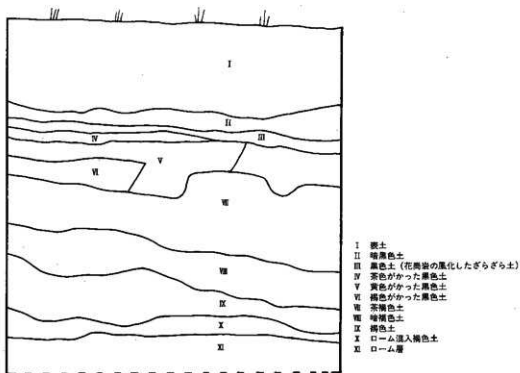


第1図 位置図

第2節 確認調査の結果



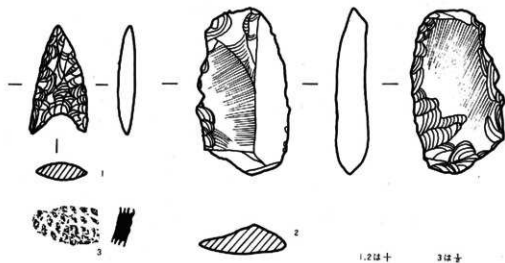
第2図 グリッド配置図



第3図 地層状況図

1. 地層状況

第2図はグリッドの配置図である。周囲が桑畑でグリッド設定が困難であったため、2009・2014地番の二筆に確認調査の場所を絞った。第3図はグリッド5の地層状況図である。全体的に傾斜が強いため土の移動が顕著であり、ローム層まで1.8m余ときわめて深い状況であった。その堆積の過程において、土器が包含されたのである。第4図2に示したスクレイパーである。グリッド1～4の上段列はローム層まで1m余で堆積状況は下段と比較して約半分ほどである。グリッド4からは楕円形の土塚がまた7.8からも土器・石器の出土を見た。この状況から判断し、羽場垣外地点においても本発掘調査の必要があると考える。

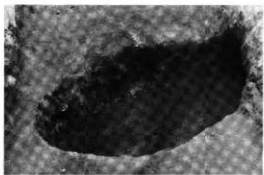


第4図 出土遺物実測図

2. 出土遺物

前述のように9ヶ所のグリッドを設定したが、すべて手掘り作業であった。その過程において、グリッド7から第4図1に示す石鐮が出土した。全長2.9cmとやや大きめの石鐮である。両縁辺はゆるやかな湾曲を呈し、鋭い刃部を作り出している。両脚間の挟りは深く、逆U字状を呈する。完形の無柄鐮で石質は黒曜石である。

2はグリッド5から出土したスクレイパーである。長さは4.4cmを計り、中央に稜をもって両サイドに刃部を有する形で、サイドスクレイパーとしてはごく一般的な形状である。3は押型文土器片である。縄文早期押型文土器の出土は初見である。米広A遺跡において早期の天神山式土器の出土を確認しているため、押型文土器が出土してもふしぎではない。これらの出土遺物、遺構の検出から考え、羽場垣外地点においては本発掘調査の必要があると考える。

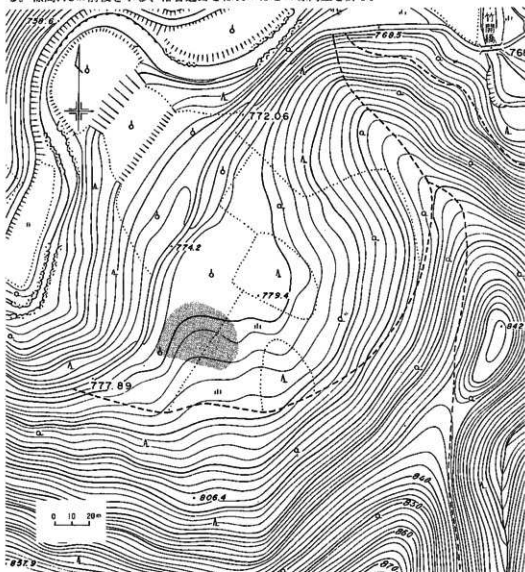


图版 IV 羽場垣外地点調査状況

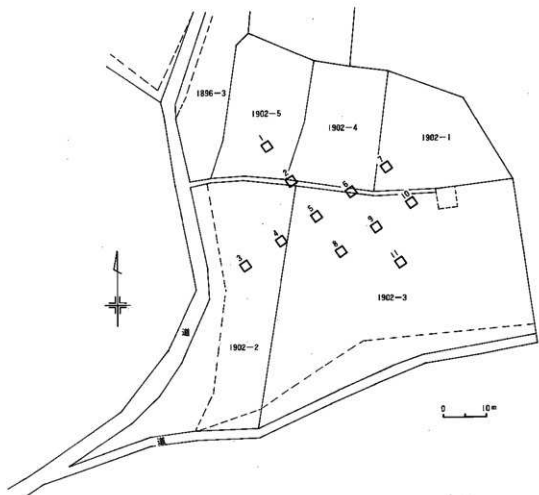
4. 所開橋南地点

第1節 位置

沢川に添って約1.5km上った所に所開橋がある。これは長岡区の最上部から川の南側を上ってこの地点に出る道路がある。以前はこの道路が主要道であった。所開の橋からこの道を約100mほど下った地点の道の上にやや凹地状の平地が広がっている。先年まで梅畑であった場所である。標高778m前後を示し、落合遺跡とは50mほどの標高差を計る。



第1図 所開橋南 地形図及び確認調査範囲図



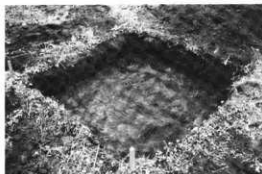
第2図 所開橋南 グリッド配置図

第2節 確認調査の結果

第2図はグリッドの配置図である。凹地やや西寄りの傾斜地に11ヶ所のグリッドを配した。全体的に礫が多く、土層状況や地積の様子は判断し難い。

各グリッド共にすべて手掘りで実施した。その過程において遺構・遺物は全く見られず、この地点においては人々の生活は無いものと判断した。

地形的にみて水便が悪く生活には不適地であったと判断する。この地点は本発掘調査の必要はないとしたい。



图版 V 所開橋南地点調查狀況

確認調査のまとめ

昭和59年10月の時点において、県教育委員会文化課、伊那建設事務所、箕輪町教育委員会、第1次の確認調査団長丸山敏一郎氏合同の現地協議を実施した。この協議において2ヶ所の本発掘調査地点の他に、末広B地点、落合B地点、羽場垣外地点、所開橋南地点の4ヶ所が地形上などから考え、確認調査を実施する必要があると判断した。

確認調査の結果は前述のとおり地点ごとに説明した。それにより落合B地点と羽場垣外地点からは遺構及び遺物の検出が確認されたため今後において、本発掘調査が必要であろう。

他の2地点はグリッド調査において、遺物等が全く見られず、遺跡地とはならない。落合B地点における遺物は縄文時代前期の土器片が検出されている。末広A遺跡において前期関山期の土器が確認されていることから、前期において、新田の谷に人々の生活があったことを示している。また配石や土壇も検出されているところからこの範囲は全面を調査する必要がある。次に羽場垣外地点であるが、南面する傾斜面は地形的にも人々の生活の舞台となる条件を備えている。予想通り遺構・遺物の検出を見た。その内容は押型文土器とスクレイパーと、比較的古い時代の様相を呈していると感じる。遺物の数が少ないため一概には決められないが、そのようにも思える。ここは地形的にもある程度広い範囲の調査となるのではないか。

以上4地点の確認調査は、今後の発掘調査に結びつく意味あるものであった。

厳しい暑さの中を調査に参加ご協力下さいました多くの方々から心からお礼申し上げます。

(柴登巳夫)

長岡新田関係遺跡 (第2次)

末広A・落合A遺跡
確認調査
末広B・落合B・羽場垣外
所開橋南地点

昭和61年3月20日 印刷
昭和61年3月20日 発行

発行所 長野県箕輪町教育委員会
印刷所 伊那市 榎小松総合印刷所